

三遠南信地域交流たずねある記 (10)

三遠南信地域 路線バス乗り継ぎの旅 (6)
 豊橋駅から飯田駅へ (1)

いしえ
 ～古の人流・物流の舞台となった街道を行く～

三遠南信地域路線バス乗り継ぎの旅は、三遠南信トライアングルの最終行程、豊橋駅から飯田駅へと向かうコースとなる。

■長野県境へのバス乗り継ぎを確認

豊橋駅から飯田駅へ、国道151号を北上して長野県境へと向かいたい。阿南町新野にたどり着ければ、そこから飯田駅へ行くバスがあることが判っている。調べると豊橋駅から新城までは豊鉄バス1本で行けることが判った。ただ、その先は国道151号に行くバス路線がない。輸送需要の少ないところはJR飯田線で、ということか。

さらに調べると、飯田線が国道151号と別れ静岡県佐久間方面へ逸れて行く東栄町からは、再び国道151号を新野境までバス路線があることが判る。また東栄町へは、豊鉄バスが新城から設楽町の田口へ行っており、田口から東栄町へはコミュニティバスで行けることも判った(次頁概略図)。大回りするが飯田駅まで路線バスで繋ぐことができそうだ。



設楽町田口中心部



豊鉄バス新城線
 豊橋駅～新城市民病院 600円

■まずは豊川市内へ向かう

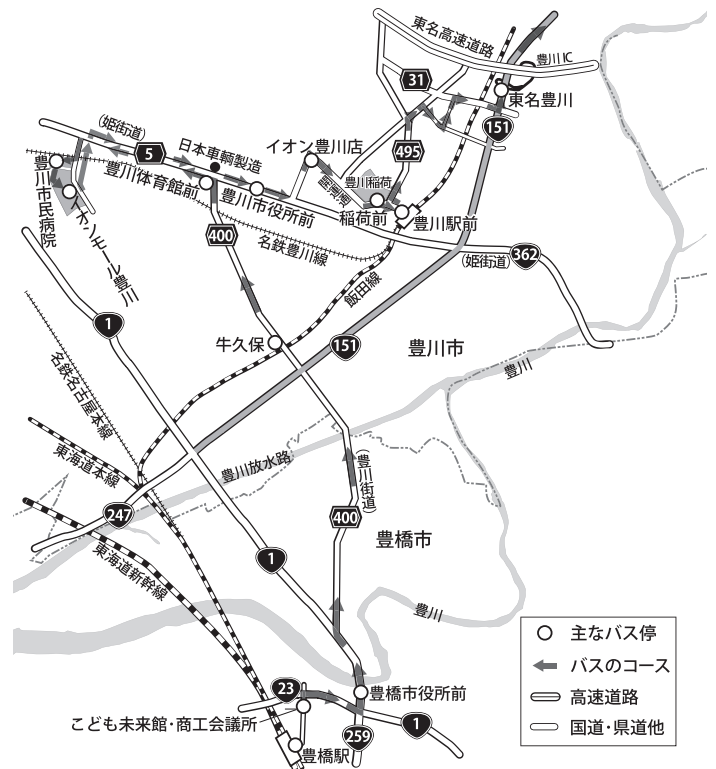
豊橋駅発は8時20分。通勤・通学者で賑わう路面電車やバスの発着所から豊鉄バス新城線新城富永行きバスに乗車。バスには通勤客らしい人が10数人、学生はいない。

豊橋駅を出発するとこども未来館・商工会議所などを経て広い通りに出るとそれは国道1号線(東海道)で、豊橋市役所前を過ぎると豊川を従えた吉田城の櫓が聳えるいつもの光景となる。

豊川を吉田大橋で渡り、豊橋市中心部から東名豊川インターや飯田方面に向かう際に通る県道400号(豊川街道)を進む。国道151号との交差点(城下)は右折せず直進する。間もなく、飯田線の踏切を渡って牛久保駅前を過ぎ、その先名鉄豊川線の踏切を渡ると豊川体育館前で県道5号との丁字交差点になる。

正面は日本車両製造豊川製作所正門。ここはかつて豊川海軍工廠があったところ。当地域から勤労動員で来ていて1945年8月の豊川空襲に遭遇されたことはいまだに記憶に残る。そこに今JR東海の連結子会社である日本車両製造がある。新幹線0系を始め、リニア新幹線の車両も手掛けているという。

三遠南信地域 路線バス乗り継ぎの旅 概略図
 豊橋駅～豊川(東名豊川)



県道5号は旧姫街道。姫街道は江戸時代御油宿（豊川）で東海道から分岐、現在の県道5号その先362号を辿って本坂峠で遠州に入り、三ヶ日を経て気賀から現在の静岡県道261号に沿って浜松、最後は見付宿（磐田）で東海道と再び合流する歴史の道であった。

この間、豊橋駅で乗車した客はそれぞれの停留所で降車していて、乗車が殆どないため車内は段々と寂しくなってくる。県道5号から左折して豊川市民病院に着いた。8時台の病院は閑散としている。停留所ベンチに3名ほど居たが、1名乗車したのみ。病院通いの人などで込み合う想定だったが。この後隣接するイオンモール豊川に立ち寄ったがここも乗降客はゼロだった。

再び県道5号へ戻り逆方向へ進む。豊川市役所前で周りをみると、市役所の他陸上競技場がある豊川公園、図書館や法務局などあり、豊川市の中心部であることが判った。豊川市役所前を過ぎるとバスは左折、角を曲がったところがイオン豊川店で、先程のイオンモールの他にもう一つイオン店がある。ここも乗降客はゼロだった。イオン前の通りは開運通というそうで、そのまま進むと見覚えのある風景に、豊川稲荷の塀に沿って走っていることに気付く。間もなく豊川駅に到着。

駅のロータリーで旋回して再び豊川稲荷方面へ、豊川稲荷の交差点（豊川稲荷前）で右折して県道495号へと進む。豊川稲荷参道にもこの時間帯賑わいはない。



JR 飯田線豊川駅（左）と名鉄豊川線豊川稲荷駅（中央奥）



新城市民病院と豊鉄バス田口新城線
新城市民病院～田口 1,200円

■ 新城を目指し豊川市郊外に行く

バスは豊川市内の住宅地を右へ左へと転じながら漸く国道151号へ出た。東名豊川で1名乗車。三河一宮の社格を誇る砥鹿神社前では1名乗車した。バスはこの後飯田線と並行して進んでいくが、面白いのは停留所名が永山、江島、東上と飯田線の駅に対応した停留所設置になっていること。

東上の次川田を過ぎたところから、国道151号は新城バイパスの方になるため、バスは旧道に入っていく。新城の街中を進み新城市民病院に到着。終点新城富永まで行くと次のバスに接続ができないため、ここで田口新城線のバスを待つことになる。

■ 田口（設楽町）行きのバスに乗車

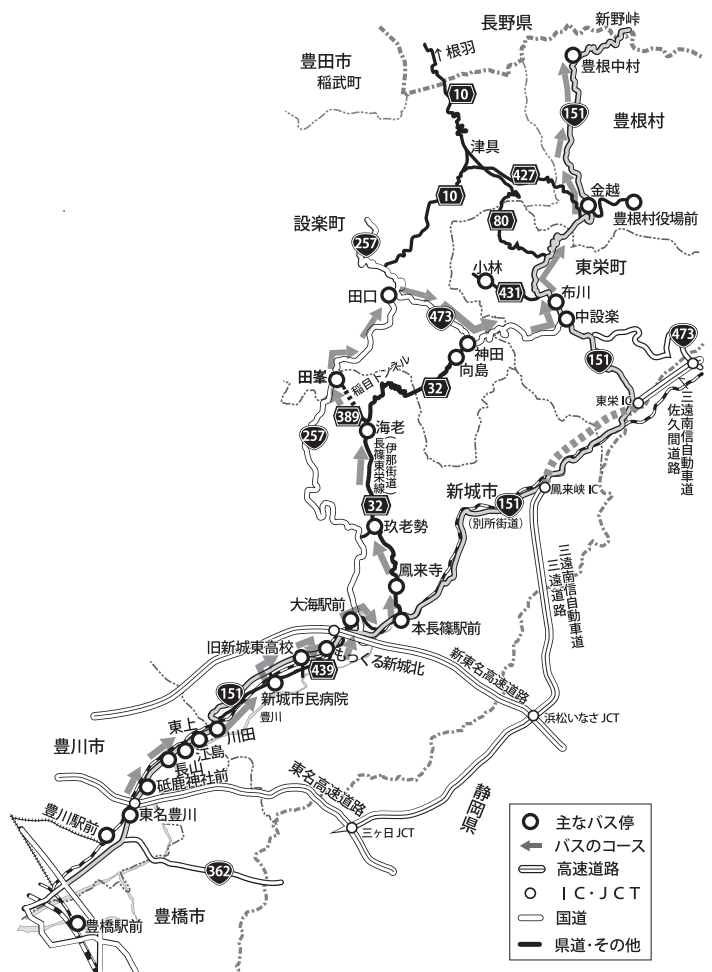
地方では病院が路線バスのハブ機能を担っていると言われており、新城市民病院構内にバスターミナルがあると思っていたが、病院前の道端にある普通のバス停だった。乗客は新城市民病院の手前千郷小学校前で最後の1名が下車し、ここから先に向かうのは私一人となった。

定刻に田口行きバスに乗車。出発して次の角で左折して新城バイパスに出るが、旧新城高校前でもた旧道（県道439号）に戻る。

川路夜燈を過ぎると国道151号に合流、新城の道の駅もつくる新城北を通過し新東名の高架を潜った後ふたたび旧道に入り飯田線大海駅前、長篠城前などを経て本長篠駅前へ到着した。

ここで時間調整のための停車があり、11時丁度の発車となる。

三遠南信地域 路線バス乗り継ぎの旅 概略図
豊橋駅～長野県境（豊根中村）



■バスは県道32号（伊那街道）へ

本長篠駅前では、出張サラリーマン風の2人が乗り込み、途中まで3人での道中となる。バスは県道32号長篠東栄線を設楽町田口に向け進むのであるが、この道路沿いで注目されているのは、かつて本長篠駅から田口（三河田口）まで私鉄（田口鉄道）田口線がほぼこの県道に沿って運行していたこと。所々残る田口線の遺構を訪ねる廃鉄マニアが一定数あるという。

田口鉄道は国有化された飯田線の旧会社の一つ鳳来寺鉄道の系列会社（「飯田線展」桜ヶ丘ミュージアム刊）で、同線は飯田線4鉄道のように国有化とはならず、その後豊橋鉄道に吸収されて営業を続け、利用者減少等を理由に昭和43（1968）年廃止となった（奥三河観光ナビHP）。

バスは鳳来寺参拝の拠点である鳳来寺や**玖老勢**、**海老**を経て県道389号線を進み、稲目トンネルを抜けると**田峯**に至る。停留所は田峯城址の足元にある。戦国時代この一帯は山家三方衆のうちの菅沼氏の支配にあったが、南信州地域と同様、甲州武田軍の侵攻に苦しみ様々対応を強いられた歴史を持つ。

そこから一つ峠を越え終点の設楽町田口にほぼ定刻（11時39分）に到着した。

■往時の街道の重要拠点田口

設楽町田口は現在、国道151号と153号どちらにも接していないため、当地域の皆様には馴染みがないかも知れないが、古くは関わり深いところであった。

一つは根羽から上津具、海老、大海等を経て新城、更に吉田（豊橋）へと繋がる伊那街道（信州側では「三州街道」）による人の移動・交流。天正元（1573）年の武田信玄の三方ヶ原の戦いの後、野田城での発病と撤退から根羽もしくは駒場で死去の際、この街道（もしくは伊那街道古道）を通過したと思われる。この地域では、信玄は田口の福田寺で死去と伝えられている（設楽町誌）。

もう一つは、天正3（1575）年の長篠合戦（設楽原合戦）に敗れた武田勝頼がこの街道を撤退したというもの。この際は田峯城の菅沼定忠が駒場まで案内したという（同）。この街道を舞台に南信州・東三河の歴史が展開した。

江戸時代には、この街道を通じた物流が盛んになる。特に信州方面で始まった**中馬**（①宿場問屋を介さない直接契約での馬背配送業 ②宿場伝馬せず付け通し ③免許制、の運送＝新井利彦氏の整理による）が次第に物流を席卷し、三州街道（伊那街道、飯田街道）は中馬街道とも称されるようになる。

これにより**伝馬制**をとる宿場問屋の営業が圧迫されたほか、追従して広まった三河の農民らによる「**三州馬稼ぎ**」とも競争が激化する（「中馬紛争」）。これら三河側から度々江戸表に対し裁定を求める訴えが起こされた（同）。

他方で、三河方面からの茶、塩、綿など様々な物資が伊那街道（三州街道）を通じて当地域にもたらされ、また当地域がこれら物流の結節点として繁栄した歴史が、この辺りの街道に遺されていると言えるのではないかと。

（飯田信用金庫 しんきん南信州地域研究所 リニア・三遠南信対策室 加藤 修平）

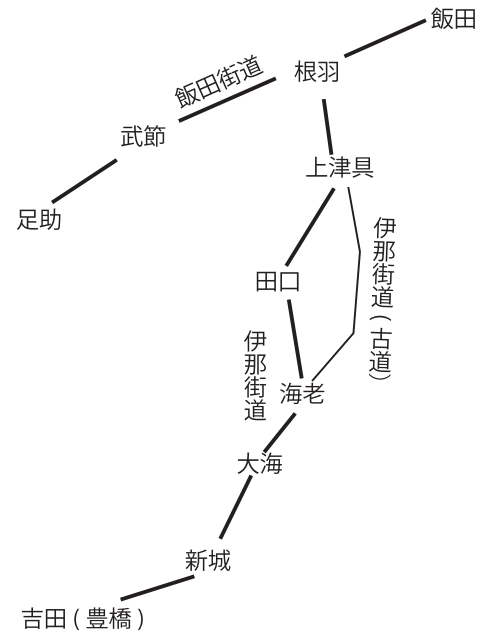


県道32号沿い風景



田口の国道257号沿い風景

中馬街道（三州街道）の概要



「設楽町誌」の解説図を省略（通史編313頁）



中馬絵馬（育良神社蔵・飯田市美術博物館寄託）